

もう一つ注意してほしいのが、「れる」「られる」です。「れる」「られる」は本来、「ラ変」がどうか「五段活用」がどうなど、実は非常に難しいものなのですが、それをじっくり考えているとわからなくなってしまうでしょうから、簡単な語法をお教えします。

一番簡単なのは、命令形が「ろ」で終わるものは「られる」で、「れ」で終わるものは「れる」と覚えてしまうことです。「**食べろ**」なら「食べられる」であって、「食べれる」とはなりません。

「**走れ**」なら語尾が「れ」なので「走れる」となるわけで、「走られる」とはなりません。

小論文の基本的な文型は、四部構成で成り立っています。それをパーツに分けると、「～だろうか」「たしかに……しかし……」「なぜなら……」「したがって……」です。

この四部構成は、小論文だけではなく、口で何かを伝えようとするときや、ものごとを考えるときの基本型ともなります。

・・・

たとえば、ミステリーも「～だろうか」「たしかに……しかし……」「なぜなら……」「したがって……」で成り立っています。

「人が殺されました。犯人は誰だろうか」と、「疑問＝意見」を提示します。「たしかに彼が怪しい。しかし彼にはアリバイがあった」「しかし、彼も殺された」というのが第二部で展開されて、第二部で「なぜなら」と根拠が示され、いろいろどんでん返しなどもありながら、最後に完結となります。

文章の書き出し方で、優れた方法はほかにもあります。一番簡単なのは、台詞（せりふ）ではじめることです。たとえば「今日はついに医者に行くことにした」「今日こそはきみに話をしなくてはいけない」といったものです。

台詞である以上、なんらかの思いや行動、しぐさ、予定といったものが入り込み、それが「**臨場感**」を生みます。先ほどの「雪国」同様、読み手を「その場」にポーッと置くことができるわけです。

自分の意見は、あくまでも1分で話すようにすることが望ましいでしょう。ただ、1分で完結させる必要はありません。一度、1分で終わっても、その中に質問者が再度質問したくなるようなことや、フレーズを入れておくようにします。これも、**相手に質問させたいようにしくむコミュニケーション能力**です。

**1回でしゃべるのは1分**。その話を聞いた相手が質問してきて、また1分しゃべるとするのが理想的です。そうすれば、面接でも、知らず知らずのうちにトータル10分独占することができるでしょう。

覚えておいてほしいのは、意見は一つひとつが完結したものではないということです。自分の意見だけ100パーセント出して言うことなどは、ありえません。会議がまさにそうですが、自分の意見があり、相手の意見があり、話しているうちにまとまっていくわけです。

## 笑わせる努力をする

笑いを取り入れるとは、場の空気をつくったり、話の間であったり、調子にメリハリをつける意味合いもあります。

文章の場合、笑いをとる努力をしてもいいのですが、まず、調子を変えることに着目してください。ずっと同じ調子で書かれた文章は疲れてしまいます。文章に緩急がつくことで、読みやすくなるのです。

何かを発見することを癖にすると、つい言いたくなる、つい書きたくなる、つまり、なんらかの方法で発信したくなるわけです。  
書きたくなって書いていると、文章は格段にうまくなります。

文章というのは、何を書いても**1万人に二人**くらいは賛同してくれる人がいるものですから、安心してたくさん書いてみてください。

少し難しい話になりますが、日本人は日本人として、自国の立場でものを考えなくてははいけません。靖国参拝、慰安婦問題なども、もしそれが日本の立場のためにならないのであれば、「賛成」も「反対」もしなくてははいけません。そんなことがあったのかなかったのか、ちゃんと言わなくてはいけないし、ときには、**真実をゆがめてでも自分の立場を守る**必要があるでしょう。

つまり、最終的に自分が話そうとしている、書こうとしている目的は何かということになります。**客観的真理ではなく**、自分の意見、自分の立場を無視しない、それが一番大事なことです。

ここを見失うと、発信する目的を失いかねません。**何よりも大切なのは、自分の立場であり、自分の立ち位置**なのです。そして、自分が言わんとしていることは何かをはっきりさせること、考えを表明することが文章なのです。

話をするときには、相手の関心を引かなくてはなりません。そのためには**何か面白い話**をしなくてはいけない、相手の関心がある話をしなくてはいけないわけです。

...

内容を少し物語風にしてもいいでしょうし、多少の誇張やウソが混じってもいいでしょう。しかしそれを気にするよりも、何かしら**面白い話を1日に一つ**誰かに聞かせよう、話をしようとするこのほうが大切です。これはコミュニケーション手段としても非常に価値があります。

## 韓流ドラマ「冬のソナタ」

「焦らす手法」

...

ところが、「冬のソナタ」になると、まず視聴者が気づいてしまうのです。「この二人はどうも兄妹なんじゃないか」「いや、兄妹ではなさそうだ」といった疑問を持たせます。2話、3話になって、やっと登場人物たちが気がつくわけですが、この「2、3話あと」というのが絶妙のポイントで、視聴者はいじらしくてしょうがなくなるのです。

...

この「焦らす手法」を終始やり続けると、視聴者は「**なんで気づかないの病**」にかかるのです。本当はここで気づくはずなのに、わざと気づかせないといったテクニックも必然的に混じってきますから、視聴者は歯がゆくてしょうがない。これで**恐ろしいくらいに感情移入**してしまうというのが、一つ目のテクニックです。

二つ目のテクニックは、「**運命にしてしまう手法**」です。そうそうないような話が、次から次へと起きてても、視聴者は「そんなバカな」と素直に思わされてしまうのです。

普通ならしらけてしまうことでも、そう思わせない工夫として、星占いやタロット占いで「この二人は出会う運命だったんだ」というようなことがときどき出てきます。そうすると不思議なことに、見ている側は「ああ、運命なんだ」と思ってしまうのです。

このしかけがなければ、「いくらなんでも、そんな偶然はないだろう」としられてしまうところを、「運命だ」のひと言で納得させてしまうわけです。これは、使い方をよく考えて仕込むと意外と効果があります。

三つ目のテクニックは、「音楽と映像でイメージをオーバーラップさせる手法」です。「二人がバスの中で会って愛を交わしたあと、雪の中を自転車に乗って……」というシーンで、BGMにワーグナーの「婚礼の合唱」を挿入します。そのシーンが、音楽つきで流れると、視聴者はジーンとするのです。

ある種、条件反射みたいなものですが、そんなシーンを5、6個用意し、その情景を「ああ、あのとき」と思い出させるようにときどき織り交ぜていくと、視聴者は釘づけになります。

基本的にはこの三つのテクニックを駆使して、「冬のソナタ」はつくられているのです。

文体を意識する「パス

ティーシュ（いわゆる文体模写）」は、少し高度なトレーニング方法ですが、文章を書くうえでものすごく勉強になります。

ギリシャ悲劇は、戯曲としても物語としても面白く、今までのいろいろな文学——西洋文学も東洋文学もすべてつけ足しにすぎないと思えるほど、「格」「流儀」はすべてギリシャ悲劇にあったと感じられるのです。

なかでも一番のお勧めは、「オイディプス王」です。とにかく面白い。母親を妻にしてしまうという、内容が近親相姦だからお勧めというわけではありません。そうではなく、自ら犯したとんでもないことを本人が発見していく過程、その葛藤に非常に引きつけられるのです。人間の苦悩とはこういうことなのか、ということが見えてくるのです。その苦悩の描き方もなかなか読み応えがあります。

ギリシャ悲劇を読んで思ったことは、「なんでも汲み取れる」ということです。つまり西洋哲学としても汲み取れる、私の少ない知識ですら汲み取れる。知識などまったくなくても、単に娯楽作品としても面白いのです。